木の目草の芽

2018年1月22日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

新しい年　２０１８年を思う

～今年一番最初に考えたこと～

近藤　雅幸

昨年の晩秋。紅葉シーズンも終わり人出が一息ついてきたころあいを見計らって、ＪＡＣの若手と南アルプス最南部を望む小川路峠をたどってきた。小川路峠は駿河から信濃に抜ける幹線道だった秋葉街道の難所の一つといわれた場所である。路傍にたたずむ数多の観音像、落ち葉散り敷く溝状の道型など、古に多くの旅人たちが歩いていたことを偲ばせるものが、道のいたるところに残り、それが特に印象的な古道だった。

集合場所はＪＲ飯田線の飯田駅。信州南部の要衝にありながら、鉄道で行くのがとても不便な場所である。飯田線は典型的なローカルであるため、上諏訪か岡谷で中央線から乗り換えたとたんに時間の進む速さがスローペースに変わってしまうのである。その結果、東京の自宅を早朝に出ても飯田につくのは午後。今回も一日目は小川路峠の麓にある遠山郷で一泊せざるを得なかった。

飯田という地名はリニア中央新幹線の駅が予定されている場所ということで皆さんの記憶にも残っていることと思う。南アルプスの下をぶち抜く予定のトンネルを抜けたところ、伊那谷の盆地に建設される予定の駅である。

ご存知のようにリニア中央新幹線計画は工事のための工事、まさしく時代はずれの大規模工事である。この工事のために自然の宝庫、南アルプスをはじめとする多くの山々の水が枯れ、生息する生き物がその住処を失ってしまう。さらに言えばすでに否定されたはずのエネルギー大量消費型のプロジェクトであり、高度成長時代の夢よもう一度といった、反エコロジーそのもののような計画である。

ではそれだけの犠牲を払ってでも工事をする必要があるのかというと、日本列島の太平洋側の輸送量は今までの新幹線システムと高速道路網で十分に賄えているし、日本で一番地殻変動の激しい南アルプスの地下をぶち抜いて、果たして東海地方に災害が発生した時のバックアップになるのかどうかも疑わしい。私にはどうしてもこのプロジェクトが本当に必要なものには思えてこない。

第 131 号

〈目　次〉

P.1　新しい年２０１８年を思う　近藤 雅幸
P.3　ニホンジカの低密度管理に向けた取り組み　松井 宏宇
P.6　ライチョウ保護 私たちにできることは　川口 章子
P.8　リニア中央新幹線に思う 大鹿村を再訪して　元川 里美
P.12　活動記録

ただ、甲府盆地南部や飯田周辺などリニア新幹線の駅ができる地元の住人たちの思いは私たちとは違い、リニア新幹線歓迎の方向に向かっているように思えてならない。政府やＪＲ東海の宣伝がうまいせいかもしれないが、「おらが町にもリニアが来る」と素直に喜んでいる人に会うたびにその感は強くなってくる。

先日も甲府盆地の南を縁取る芦川北稜に行くため、石和温泉駅からタクシーに乗ったのだが、タクシーの運転手がリニアがどれだけ地元に恩恵をもたらしてくれることになるかをうれしさを抑えきれないように話し続けるのを黙ったまま拝聴して、内心非常に複雑な気持ちになった。

想像したくもないことだが、仮にリニア中央新幹線が完成してしまった場合を考えてみよう。昨年のように秋葉街道を歩きたいと思ったとき、さらには南アルプス最南部の光岳、池口岳に登ろうとするとき、私たちはきっとリニアの飯田駅に降り立っているはずである。今まで1日目を移動でついやさなくてはいけなかったのが、その日のうちに山に入れるのである。

以前にも南アルプスに対してはスーパー林道計画なる山岳環境破壊の大プロジェクトがあった。ほかの部分ではとん挫したところも多いが、戸台～広河原間は計画通りに開通し、現在は観光の売り物の一つになっている。いまや仙丈ケ岳に登る登山者のほとんどすべて、甲斐駒も2／3くらいの人はここを通るバスを利用して登山口の北沢峠に向かっているに違いない。昔、戸台から赤河原まで河原を歩き、八丁坂の急坂を登って何とか一日かけて北沢峠にたどりついたことを思えば、つくづく便利になったと思う。この林道は地元の伊那市にとっても観光の目玉としてなくてはならないものになっていると聞く。

ただ、この林道に一般車が入れないようになったのは、自然保護の声が高かったからでもある。リニアについてもほぼ出来てしまうのが既成事実となっている今、出来上がった時に地元の振興と自然保護が両立するようなアプローチが取れないか、我々もいまのうちから考えてみる必要があると思う。

（自然保護委員会担当理事）

〈お知らせ〉

■シカを見たらスマホで送信！にＱＲコードができました

（国立研究開発法人）森林総合研究所が中心になった野生鳥獣分布拡大予測共同研究機関がＷＥＢサイト「シカ情報マップ」でシカ目撃情報の収集を始めています。『木の目草の芽』130号でシカ目撃情報のスマートフォンの操作手順を掲載しましたが日本山岳会用「ＱＲコード」が設定されました。ＱＲコードを読み取ることですぐにページにアクセスできるようになります。ご活用ください。

■講演会「アラスカ大自然の生活と環境」を開催します

講師　茅野　徹　氏

米国 Pacific Rim Service 社 代表取締役社長

アラスカデナリ州立公園在住12年

日時　1月31日（水）18時30分～20時

場所　日本山岳会　集会室

（当日参加も受け付けますが配布資料および会場の都合上まずご予約下さい）

川口章子　TEL　０９０－１２５２－２９１４

〈群馬県「赤谷の森」でのシカ対策について紹介していただきます〉

ニホンジカの低密度管理に向けた取り組み

公益財団法人　日本自然保護協会　松井 宏宇

▼なぜ低密度管理を目指すのか

ニホンジカ（以降、シカ）は、全国で分布域を急速に広げています。シカが高密度に生息している地域では、農林業被害に加え、自然林の世代交代を妨げ、土壌の流出を引き起こすなど、生態系や生物多様性の保全上、大きな脅威となっています。シカによる環境への影響は、被害が大きくなってからでは元の状態に回復させることが難しく、また多額の費用が掛かります。そのため、被害が少ない低密度の段階から管理を行うことが重要となっています。一方、現在のシカの捕獲・管理の取り組みは、被害が大きい高密度な場所を対象とした取り組みが中心で、低密度でのシカの管理・捕獲技術は未確立で、ほとんど実施されていません。実施に向けては低密度であるからこそシカとの遭遇率が低いことにより捕獲が難しくその分1頭あたりのコストが掛かり、さらに低密度であるからこそ現時点で差し迫った被害がなく危機感が薄いことから取り組みへの意欲を高めにくい、などの難しさがあります。

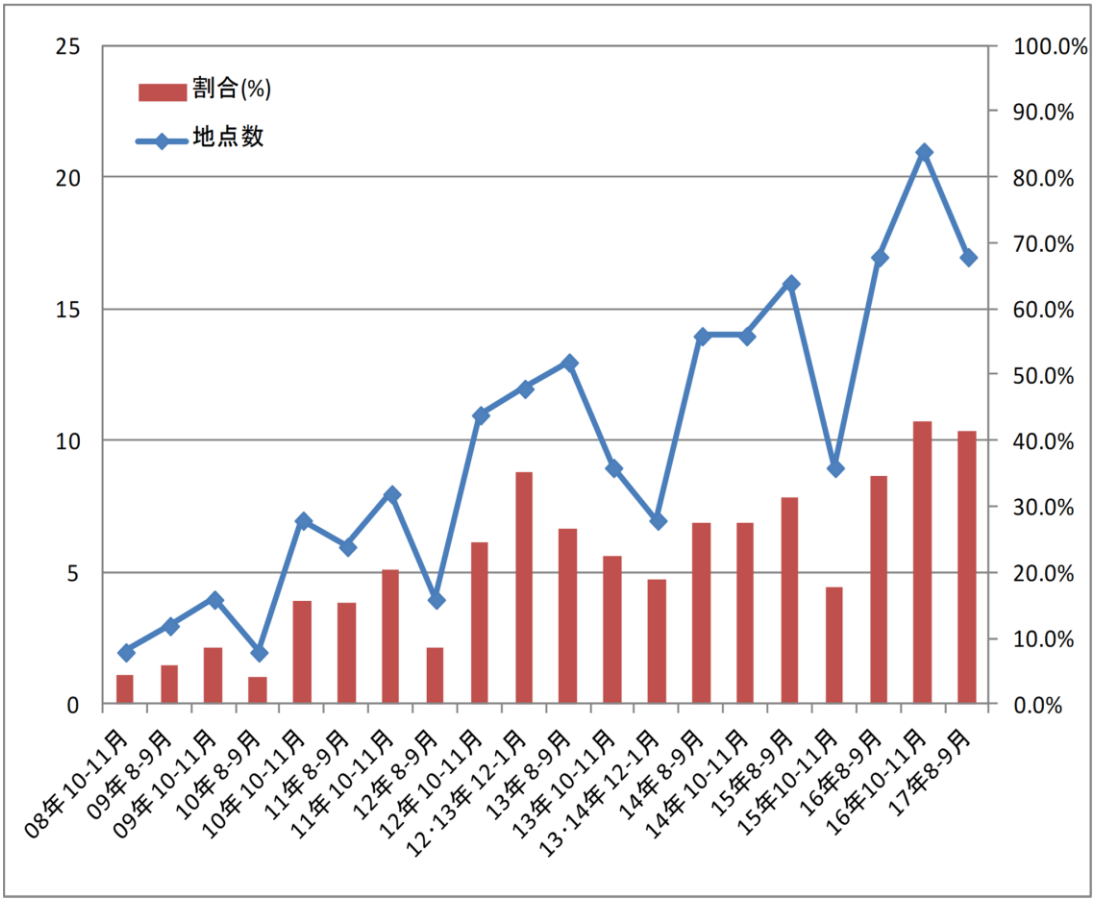
そのため、赤谷プロジェクトでは低密度管理の先行事例を作り、全国へ発信、波及させることを目指して、取り組みを進めています。

▼赤谷の森における　ニホンジカの状況

日本自然保護協会は、２００３年頃から行政（林野庁関東森林管理局）、地域住民（赤谷プロジェクト地域協議会）と共に「赤谷プロジェクト」を立ち上げ、群馬県みなかみ町の赤谷の森と呼ばれる約１万haのエリアを対象に、生物多様性の復元と持続可能な地域づくりを目的とした様々な取り組みを実施してきました。赤谷の森において、シカは１９９６年頃から生息が確認されています。その後の文献調査などから、２００１年に初めての捕獲記録があったことがわかりましたが、確認数も少なく、プロジェクトの立ち上げ当初は、シカを主とした調査を行っていませんでした。

２００８年から哺乳類全般を対象にセンサーカメラを用いた調査を行ったところ、年々シカが増加していることが分かり、２０１３年からはシカに焦点を当てた取り組みを行ってきました。２００８年には51地点中シカが確認されたのは2箇所だけでした。その後多少の季節変動はあるものの、最も多く確認された２０１６年10～11月の調査で確認された地点は21箇所となり、２００８年当初と比較し、10・5倍となっています。（次ページグラフ参照）

赤谷の森では、植生の一部で影響が生じ始めているものの、全体として比較的健全な状態を保っています。しかし、シカは年間1・2倍程度、4年で約2倍に増加するともいわれており、このままではあっとい



赤谷の森のニホンジカの出現地点変遷

(2008～2017 年　全 51 地点※)

※カメラの故障等により調査地点が 51 地点以下の場合もある。

う間に増加し、植生へも深刻な影響が出ることが予想されます。

これまで赤谷プロジェクトでは、センサーカメラを用いた調査や植生調査を重ね、シカが植生へ与える影響について、指標や評価方法の検討を進めてきました。また、実際に低密度管理を進めるためには多様な主体との協力が必要であるため、地元猟友会を始めとした関係者との意見交換会を実施してきました。こうした積み重ねを経て、２０１７年度より実際の捕獲試験を開始しました。

▼捕獲試験の実施
～低密度下でのシャープシューティング～

今回捕獲に用いた方法は、「シャープシューティング」と呼ばれる技法です。シカを狙撃した際、狙撃から逃げることができたシカは、学習によって人や狙撃に対する警戒心が高まり、捕獲することが難しい「スマートディア（スレジカ）」となります。警戒心が非常に強いスマートディアの捕獲は困難を極め、通常のシカと比べて大きな

労力が必要となります。シャープシューティングは、こうしたスマートディアの発生を抑えるため、高い技能を持った射手が一度に全頭狙撃可能な場合にのみ狙撃し、捕獲する手法です。仮に10頭のシカが一度に出現した場合など、逃げ出すシカが生まれる可能性が高い状況では、捕獲を行いません。射手の技量にもよりますが、およそ３頭以下の出現に当たってのみ、捕獲を行います。２０１７年度は、シカが好む鉱塩（塩のかたまり）であらかじめシカを誘引しておき、鉱塩を舐めにきたところを撃つ、という方法で実施しました。

▼ 捕獲試験の結果と今後の取り組みについて

４日間の捕獲試験の中では、捕獲に至りませんでしたが、鉱塩と共に設置したセンサーカメラからは、赤谷の森におけるシカの出現時間は日没後、夜明け前に多いこと、８月よりも９月初頭や10月末に多く出現することなどの行動がわかってきました。また、捕獲の実施準備段階における手続き、地域や関係者との話し合いの過程で、シカの課題や取り組みへの理解が広がったことも一つの大きな成果と考えています。

今回の捕獲試験からは、低密度であるがゆえに出現数が少なくシカとの遭遇が難しいこと、出現時間が夜間に偏っていること（法律上、夜間の発砲は原則禁止）の２つが大きな課題であることがわかりました。これを踏まえ、今後は、より効率的な誘引方法の検討や夜間も捕獲できる方法の検討を実施していく予定です。現在も、積雪期の牧草による誘引試験をはじめており、２０１８年度は、林内用の囲い罠（ネットを張り巡らせて囲いを作り、シカが中央部に設置した餌に触れると入口が閉まる罠）やドロップネット（遠隔操作で上から網を落とす罠）等夜間も動作の可能な罠の試験を検討・実施していく予定です。

低密度管理にはまだまだ課題がありますが、引き続き実現に向けて取り組んでいきます。応援よろしくお願いします。

（マツイ ヒロタカ）

鉱塩を舐めにきたシカ

ライチョウ保護
私たちにできることは？

川口 章子

２万年前の最終氷河期がおわってから、日本の山に閉じ込められて奇跡的に生き延びた鳥、ライチョウの絶滅が懸念されています。２０１２年には第４次レッドリストで絶滅危惧種Ⅱ類からＩＢにアップリストされました。環境省は同年に種の保存法に基づく『ライチョウ保護増殖計画』を作成し、２０１４年には『実施計画』を作成し、国、地方自治体、動物園などが連携して保全を進めています。

ライチョウの生息地における保全[生息域内保全]と飼育下繁殖など生息域ではない場所での取り組み[生育外保全]に分け、平成26年度から平成30年度までの短期目標の達成に向けて取り組んでいます。[生息域内の保全]では孵化直後のヒナを守るためにゲージ内で家族を保護する取り組み、捕食者対策としてテンの捕獲、ライチョウの餌資源の矮性低木の成長を妨げるイネ科植物の除去試験などを実施しています。

カラスによるライチョウの卵の補食、ニホンザルのライチョウヒナの捕獲など確認され、カラスの捕獲、サルの追い払い事業が実施されています。

[生息域外保全]では環境省と(公社)日本動物園水族館協会は希少種保全のための協定を締結していて卵を採取し孵化し飼育して飼育繁殖技術の確立を実施しています。これらの保護増殖事業への参加、協力はかなりの専門性が必要ですが、一般登山者に向けての養成講座『南アルプスライチョウサポーター養成講座』が昨年12月9日に韮崎市で開催され、目撃情報提供者の養成講座が始められました。

調査が進みライチョウ目撃情報の提供は、精度の高い情報が必要なため、誰でもいいわけでなくより正確な情報集めには教育を受け、正しい知識をもった人が担うところまで進んでいるのです。

■ライチョウの絵葉書配布活動

さて、日本山岳会の取り組みはそれより早い１９９７年に山の自然学研究会の活動として、『ライチョウ保護に関する活動』を始めています。

手がかりとして『ライチョウの絵葉書を作り保護を促進する活動に結びつけようと大町市の山岳博物館、富山県ライチョウ保護関連団体に寄贈し配布活動を始めています。

この頃はまだライチョウの保護には関心が薄く絵葉書を置いてもらえるところも少なかったと活動に参加した時の報告が『木の目草の芽』の１９９７年９月発行に書かれています。

その後状況が変わり、今ならと、この活動を中心になってされている大森弘一郎氏から自然保護委員会に活動の継続の要請があり、委員会に大森氏を招き話を聞き、絵葉書を作り配布活動を委員会活動として取り組むことにしました。

しかし自然保護委員会の予算は少なく寄付を募って作成しています。

この場を借りてご報告をさせていただきます。

昨年の岐阜で開催した自然保護全国集会で、ライチョウ保護カンパをお願いし２万７千８百円、上高地山岳研究所利用者にカンパを頂だいた１万円、合計３万７千８百円はライチョウの絵葉書を作成し登山者への啓蒙活動に活用させて頂きます。

会員の方も山小屋、できればライチョウ

生存近くの山小屋、登山口での配布に、子どもたちの登山参加者への配布にご協力をお願いします。

■ライチョウ張子作り

もう一つの活動は、大森氏がライチョウの張子作りを考え付かれ、子どもたちと上高地で始められました。

作り方はライチョウの型をラップで包みその上に大型の封筒（使用済み）を幅2センチくらいに細長く手で裂き貼り、型を取り出します。この型抜きは、ちょっと大変な作業ですが子どもたちは、「あ！生まれた」と歓声をあげます。さらに貼り重ねます。よく乾燥して色彩を付けて完成です。

大森氏から自然保護委員会でこの活動をやらないかと言われ、これならやれそうだと始めました。まず、友人の孫から始め、近所の子どもたちが夏休みの研究になると参加してくれ何とか手ほどきが出来ると少し確認したところで、一昨年夏に上高地の小梨平キャンプ場のオーナーが準備をしてくださった場所ではじめました。

日程が取れず2日間開きましたが、この活動を継続したいと思う出会いがありました。

小学5年の男の子が「作らせてください」とやってきたのです。作り方を伝えライチョウの大切さ、自然保護の話と会話も弾みました。

まず、型を取り出す作業に歓声を上げ、彩色するのに夏羽、秋羽、冬羽にするか迷いに迷い、夏羽に決め工夫をしながら彩色し雄を完成させました。

この後の彼の行動に思わず微笑みました。彼は自作のライチョウを両手で持ち高く掲げて「うまくできた、できた」と誇らしげに道の中央で回転をはじめました。そして、我にかえったのか「自画自賛しちゃった」とはずかしそうに言いました。

「来年も来るから、きっと来てね」と言ってライチョウを抱いて帰っていきました。

昨年は7日間開きました。勿論、彼も来て雌のライチョウを作り「家族が増えた」と喜んでいました。

小梨平のキャンプ場には高齢者も来られていて、お仲間3人組が来られ作られました。

滋賀県からのご夫婦は夫婦共同作業で作り、仕上げは家ですると持ち帰り完成した張子の写真を送ってくださいました。玄関に飾っているとのこと、自然保護活動をしてくれていると写真を見ています。

◇

２０１７年9月13日に朝日新聞の天声人語でライチョウの事が書かれていました。

『長い歳月を生き抜いたライチョウがいま絶滅が懸念されるほどに減ったとしたら、地球は一体どれほど劇的な異変のなかにあるのだろう』と。

自然とどう人間が向き合うかいま問われている。

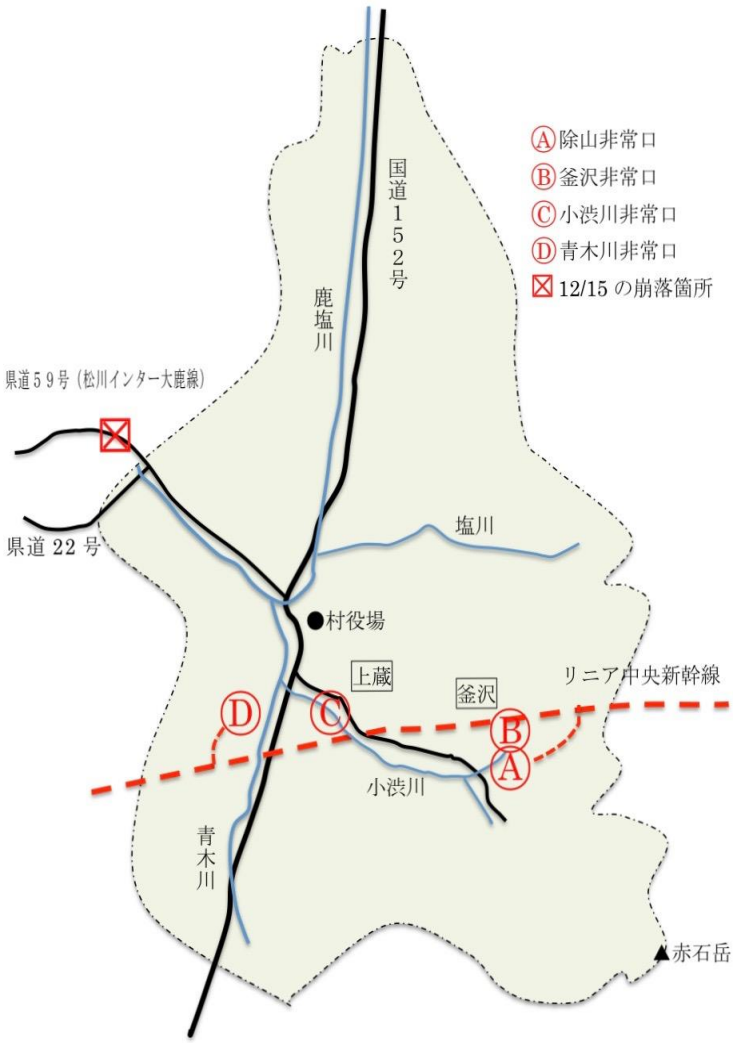
（自然保護委員長）

リニア中央新幹線に思う
～大鹿村を再訪して～

元川　里美

大鹿村を初めて訪問したのが２０１４年の７月だった。当時はまだリニア関連工事が始まる前で、深緑の里山はひっそりと雨にけむっていた。上蔵（わぞ）や釜沢（かまっさわ）の集落を縫いながら細い道を進むと小河内沢川にかかる小さな橋がある。その手間の石垣で見た希少種のシダ、トキワトラノオのことを「木の目草の芽」111号に少し書いたが、そこからほど近い対岸にはリニア非常口の掘削工事予定地があるということだった。その後、２０１６年11月に大鹿村でリニア中央新幹線南アルプストンネル長野工区の起工式が行われ（この時の様子は佐藤明穂氏によって「木の目草の芽」125号に報告されています）、現在は「除山非常口」と「小渋川非常口」の掘削が進められている。

着工以来、リニア工事関連のニュースは、（最近の不正入札疑惑報道はともかく）こちらから求めようとしなければなかなか入手できない状態であることをずっともどかしく思っていた。そして何よりも、晴れた日の大鹿村の風景をもう一度見たいという気持ちもあって、３年ぶりに大鹿村を訪ねたのが、年も押し迫った昨年の12月19日だった。天気予報をにらんでいた甲斐あって、申し分のない見事な冬晴れに恵まれたのはよかったが、数日前に大鹿村への主要道路が土砂崩落で塞がれ通行止めとなり、別の道を迂回せざるをえなくなっていた。土地勘の薄い私はリニアの掘削現場での崩落と早合点したが、現場は「県道松川インター大鹿線」上の大鹿村入り口付近だった。とはいえ、大型車両通行のために道路整備を行っている現場なので、これもリニア関連工事のひとつにはちがいない。夜間の出



＜注：概略図のため実際の位置とは若干異なります＞

来事で、人が巻き込まれずに済んだのはさいわいだったが、崩落の原因はトンネル内での発破による振動であったとして、後日ＪＲ東海は謝罪をしている。

ところでこの迂回路（県道22号線）というのが、おそらく普段はもうあまり使われていないのではと思われる、狭くて場所によってはなかなか高度感のある峠道だった。そのうえ工事用の大型車両も往来しているため、私のように不慣れなドライバーはなおさらに緊張を強いられた。はからずも、このあたりの山の脆さと住民の置かれている状況を、村に入る前から身をもって知ることとなった。

大鹿村の会員、佐藤明穂さんのはからいで、この日は村議会議員の河本明代さんが案内してくださることとなった。恐縮しつつご厚意に甘え、トキワトラノオの自生地と、「除山非常口」「小渋川非常口」の掘削現場を巡った。

「小渋川非常口」は小渋川の広い河原の右岸に位置しているので、現場のごく近くまで行き写真を撮らせてもらうこともできた。近隣の集落に配慮して防音ハウスで大きく囲まれており掘削現場を直接覗くことはできないが、壁の内側ではベルトコンベアーが次々と掘削土を運び出しているらしい。中から漏れてくる耳慣れない無機質な音と、高く積み上げられた掘削土から、山が着々と穿たれつつあることが想像できた。防音ハウスの脇には騒音計が設置され、騒音と振動の数値が交互に電光掲示されている。（ＪＲ東海は騒音について日中は60dB、夜間は50dBを自主管理基準としている）この現場では昨年の夏から発破作業も始まっている。音や振動は基準内に抑えられているというが、夜間も発破が行われているというのは驚きだ。立ちはだかる防音ハウスに圧倒されながら足元に視線を落とすと、うっすらと積もった雪の上にキツネや野ネズミの足跡がいくつも残されていた。我々よりもはるかに音や匂いに敏感な彼らは、この突然の異変をどのように受け止めているだろう。

小渋川非常口掘削現場の防音ハウス

防音ハウス脇に設置された騒音計

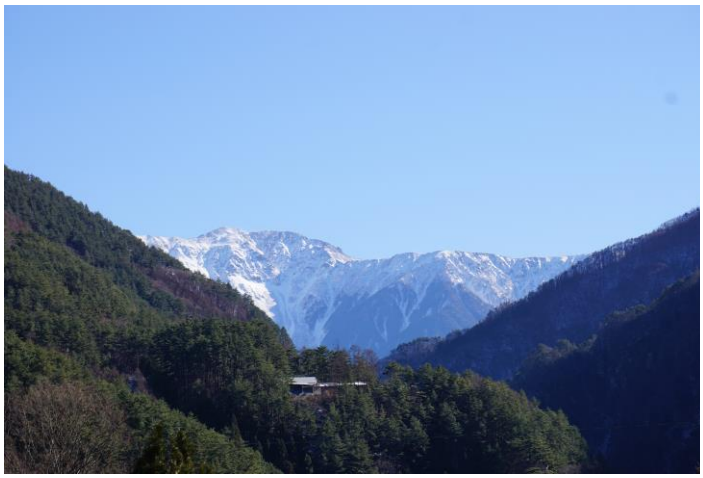
小渋川非常口掘削土仮置き場
（この場所は後に変電所を建設予定）

一方の「除山非常口」は、そこから更に奥、かのウエストンが辿った赤石岳登山道入り口の小河内沢（おごうちざわ）左岸に位置している。前回トキワトラノオを見たのがこの現場の近くだ。車を止めて同じ場所で石垣の間を探す。うろ覚えの風景に当て所なく視線を泳がしていると、「これがそうですね」と先に河本さんがみつけてくれた。冬を迎えてすっかり元気がなくなっているが、なんとか生え残っていた。うれしくなって、もうヨレヨレの小さなシダを何枚も撮影した。大鹿村の自然をほとんど知らない私にとっては、このシダが目に見える唯一の指標なのだ。ダンプの撒き散らす土埃に負けずにこのままなんとか子孫を残し続けてくれたらと思う。が、聞けばこのあたりも掘削土置き場候補地にあがっていて道路改変の話も出ているというから、この先ここで生き残るのはもう無理かもしれない。

ここまで奥に入ると山が迫っているために見通しがきかず、対岸の掘削現場へも近づくことはできないので、少し戻って上方の林道まで上がった。そこから木の間越しに、鈍色の巨大な箱型建造物を見下ろした。さきほど見たものよりもずっと大きい。こちらも釜沢集落が近いため、防音ハウスで覆われているのだ。どれくらいの人が中にいて、どの程度まで作業が進んでいるのかは一切わからないが、ここから本坑に向けて1.9 kmの作業トンネルを掘り進めようとしている。見えないことが余計に想像力を掻き立て、次第になにか不安な気持ちになってくる。ちなみに山梨側の掘削現場は周辺に集落が無いので、このような建物は設置されていないという。

例の峠道を通って買い物へ行くという河本さんと別れてから、私は再び上蔵の集落に戻り、大銀杏の脇に車を止めて福徳寺の本堂の前に立った。確かに、ここには素朴

上蔵集落の福徳寺


上蔵集落からの赤石岳

で美しい里山風景があり、これこそが日本人にとっての原風景であるとしみじみ思う。ふり返ると山並みの奥から白銀の赤石岳が神々しい姿でこちらを見下ろしている。そういえば、大鹿村はタケミナカタ伝説の地でもある。人々は山懐のいたるところに神々の気配を感じてきたにちがいない。そんな山谷を削って、リニア新幹線を走らせようとしている。

自然は、すべてが互いに影響しあいながら途切れることなくつながっていて、私たち人間もその一部に組み込まれている。同じように、科学技術も、互いに影響し合いながら進歩を遂げて私達の暮らしを作り上げてきた。時には自然から身を守るために私たちは科学を駆使する。だから、私はリニア新幹線そのものを否定はしない。けれども、専門家のすぐれた知識をもってしても“想定外”の自然現象を推測することがいかに困難であるかを私たちは知っているから、数々の不安を杞憂であると断じることはできない。様々な問題が指摘されている事業を、無理に押し通すような形で急ぎ進めることも納得がいかないし、なによりも、高度な技術を未来へ引き継ぐというなら、ありのままの自然をできるかぎり子孫に残すこともまた、私たちに課せられた責務だ。

日本で最も美しい村を見て歩きながら、私はつい最近ここから発信されたあるメッセージを思い返していた。大鹿村の、できるだけ新鮮な情報を得ようとインターネットをさぐっていた時、ふと目に留まったのが、『カメムシからお便りが届きました』という某旅館のブログだった。「あなたがこのお部屋で見かけるぼくたちカメムシの多くは、クサギカメムシという種類です。」という書き出しで始まる手紙は、これから寒くなると自分たちは客室内に入り込んでしまうけれど、嫌ったり怖がったりしないでそっと見守ってほしい、と語りかける。……この谷にはたくさんの生き物がいて、それぞれがここで生きていく力を受け継いできた、そのチカラを感じてほしい、と。

綴ったのはもちろんカメムシではなくて、お宿のどなたかにちがいないが、この手紙を読んだとき、大鹿村の風土が育んだ、瑞々しい精神の輪郭を見た気がした。この村の人々は、慣れ親しんだ自然と上手に折り合いをつけながら、日常をしなやかに丁寧に暮らしているのだろう。

遠くで指揮を執る人たちのことはわからない。けれどもせめてあの壁の向こうの作業員たちは、この自然に触れてためらいを覚える人々であってほしいと思った。

（自然保護委員）

◇自然保護委員会の活動報告

〈十一月度〉

報告・連絡事項

①理事会　11月9日（木）

自然保護委員会の活動として『携帯トイレの携帯』を提案。

②科学委員会から『山のマナーノート』作成の呼びかけに対応する。

③自然保護委員会の秋の自然観察会開催

11月3日（金）参加者　11名

於・東京都あきる野市『横沢入り』都・里山地域

④自然保護委員会　11月13日（月）19時

＊２０１８年度自然保護全国集会について

日時・平成30年7月8日（日）～9日（月）

場所・石川県能美市辰口町・『旅館まつざき』

実行委員長・谷内剛　自然保護業務執行理事

＊10月度拡大委員会から　10／28（土）～10／29（日）於・笹ヶ峰　京大ヒュッテ　参加者7名

＊『携帯トイレ』の携帯を自然保護委員会の活動にする。将来的には携帯トイレの回収を市町村に働きかけることを目指し、まずは登山者個人が携帯するように働きかけをする。

⑤11月21日（火）19時～　参加者6名

国立研究開発法人　森林研究・整備機構森林総合研究所　野生動物研究領域長　岡輝樹氏の『シカ調査に関わる協力要請』の説明会開催。

協議事項

①全国集会について

開催時間、テーマ、参加費等。

②『木の目草の芽』の印刷負担が個人にかかっているので印刷を外部に発注することを検討。見積もりを取る。

③『携帯トイレ』に取り組むことを支部に伝え、トイレ状況、意見を聞く依頼文書を作成準備をする。

④『木の目草の芽』１３１号編集企画。

⑤山岳団体自然環境連絡会11月30日（木）於・労山事務所　川口委員長、山田委員出席

２０１８年3月11日（日）第2回シカ問題シンポジュウムの実施について。

〈十二月度〉

報告・連絡事項

①12月4日（月）19時　川口委員長出席

ＪＡＣの１２０周年の記念行事の検討会

②自然保護委員会

12月11日（月）

＊会報『木の目草の芽』１３０号発行・発送

印刷14時～発送17時～

＊南アルプスライチョウサポーター養成講座受講者の日吉氏をゲストとして迎え報告を聞く。

ライチョウ目撃情報の提供は精度の高い情報が必要なため、教育を受け正しい知識を持った人が担うことになる。

③理事会は12月13日（水）

委員会、支部が関わる全ての山行計画書について計画書提出が義務化される見込み。

協議事項

①自然保護全国集会について

②講演会開催

日時　1月31日（水）19時～

会場　ＪＡＣルーム

「アラスカ大自然の生活と環境」

講師　茅野　徹氏

〈編集後記〉 自然保護協会の松井さんに赤谷の森での取り組みをご紹介いただきました。低密度ゆえの難しさ…でも侵入し始めたタイミングでくい止められれば。自然保護も初動が肝心ということでしょう。まずは気付き。そのための観察。今年もよろしくお願いいたします。　元川